減災ストーリーブック『いのちをまもる智恵』が問いかけるもの
―その原点と願い

栗田 暢之 *Written by Nobuyuki Kurita*

はじめに

2009年夏のある被災地での出来事である。「わずか200m先の指定避難場所へ避難するだけだった。しかしすでに濁流が道路を覆い、行く手を阻む。すでにどこからどこまでが道なのかもわからない。しかもあたりは真っ暗である…」。そして翌朝、マニュアルどおりにロープで互いを縛った親子の溺死体が発見された。

毎年のように起こるこうした災害での悲劇が後を絶たず、ここ数年だけでも災害で犠牲となられた方々の何と多いことか。苦しかったろう。痛かったろう。無念だったろう。まずは心よりご冥福をお祈りしたい。そして、災害救援NPOとして、自らの力不足を悔いるとともに、次の犠牲者を出さないために、もっと全力で「減災活動」に取り組む必要性を痛感している。ただし堤防をより高く強固なものにするとか、延焼を防ぐように道路や公園を整備するなど、都市計画等ハード面の課題については専門家にお任せすることにするが、私たちが力点をおきたいのは「人間の災害対応力を高める」というソフト面である。つまり、過去から培われてきた「智恵」を駆使し、私たち自身の「生き抜く力」を高め、災害からいのちと暮らしを守ろうということである。

私はこれまで約30の災害現場での活動に携わってきた。その被災地で少し気になるのは、災害後に取り沙汰される反省や教訓じみたものが、行政批判または行政による災害対応への

期待ばかりが取り上げられ、肝心の私たち自身の再確認・点検につながっていないのではないかということである。確かにかけがえのない「いのち」を守ることに対して、行政が全力を尽くすことは当然である。しかし、それに頼り過ぎて私たちがお客様でいいということではないはずである。なぜなら私のいのちであり、私たち自身が暮らす地域のことだからである。私たちの大切ないのち・暮らしの問題を他人任せにしていいはずがないことは言うまでもない。

子どもの頃の記 ～我が家が避難所に

今から30数年前の1976年9月4日に発生した台風が、折からの秋雨前線を刺激し、記録的な集中豪雨をもたらした。同月12日には岐阜県長良川の右岸堤防が80mにわたって決壊し、岐阜県下で約7万6千棟もの住家に浸水被害をもたらした。いわゆる「安八（あんぱち）水害」である。堤防が決壊した岐阜県安八町から1つ町を隔て、私の実家がある穂積町（現瑞穂市）にも浸水被害が広がった。我が家は寺院でもあり（私自身も僧侶である）、まわりよりは少しだけ盛り土が施してあったため、結果的にぎりぎり床下浸水で済んだ。しかし、近隣の家々は1mほどの床上浸水となり、ごく近所の5世帯28人、私の家族を合わせて33人が本堂で避難所生活を送ることになった。私は小学校6年生で、姉貴に言わせれば「あまり手伝わなかった」と今でも愚痴を聞かされるが、当時の記憶としては私なりに畳上げや、いざとなれば2階へ避難するということで、部屋の整理整頓に勤しんだのである。両親も40歳代である。家族全員が協力して、できるだけの備えを施した。また近隣住民との避難生活でも、母親たちが腰まで水に浸かりながらも「食せるものは何でも」かき集めてきて、33人の3食を工面した。あの時のカレーライスは、いつものとは違ってとっても薄味だったが、みんなで「いただきます」をして本当に感謝して食べた。浸水して3日後ぐらいだったか、今度は隣町の親戚の叔父がボートで食料を運んできてくれた。本当にありがたかった。こうして1週間ほどの集団生活を経て、徐々に水が引き始めたら、一斉に大掃除を始めた。しかし自分の家だけをするのではなく、近所同士、一軒ずつ全員が協力し合った。一番早く風呂が使えた家にお邪魔し、幼馴染と久しぶりの風呂ではしゃいだことをよく覚えている。「水害の　後のお風呂の　ありがたさ」と即席の川柳もつくって喜びあった。こうして、家族で、そして地域で支え合い、助け合いながら水害からの被害を乗り越えたのである（ちなみに当時は全国からボランティアが駆けつけるといったことはなかった）。

しかし、あれから30年以上が経過した今、両親や近所の方々も老いた。何より、新しい住宅も増え、そもそも水害の常襲地だとは思って住んではおられないと思う（普段からもあまり会話を交わすことがないのでわからない）。つまり、今同じような水害が来て恐ろしいと思うのは、あの時のフラッシュバックのような恐怖感だけではなく、昔のようには協力できないだろうと容易に想像がつくことの方が深刻な課題である。時代の流れとはいえ、「何だか人が冷たくなった」と思う。

「輪中」の智恵

そもそも私の実家付近は「輪中」といわれる地域であった。それは、空から見れば、まるで洗面器を並べたように、集落ごとに輪中堤防によって守られている地域のことを指す。つまり、水害とは長い付き合いを経て現在に至っているのである。したがって、私の祖父母の年代の方々からは、四六時中過去の水害の話（1959年の伊勢湾台風や1961年の集中豪雨など）を聞かされていた。また、智恵もいろいろと教えられた。「ここが降っていなくても、上流部で雨が大量に降ったら、川に近づくな」「堤防が切れたら、全部戸を開けよ（戸が閉まっていると家ごと流される危険があるから）」。また隣家には脱出用の小舟が軒先に常時吊るされていたし、水屋といわれる水防倉庫を持つ家もあった。そして先述のようにそもそも浸水被害が広がらないよう、昔からの家や私の実家がそ

うであるように、地域の重要施設はもともと盛り土をして対策をしていたのである。こうして様々な智恵を伝承しながら、この地で生きるためにいのちを守ってきた。そしていのちより大切ともいえる「米」を守り、日々の暮らしの営みを支えてきたのである。

しかし、昨今はその伝承も息絶え絶えである。そもそも安八水害以来、大きな水害がないので、こうした備えの必要性が理解されなくなってきた。また核家族化で伝承そのものができていない。そして私の実家のような田舎町でも、少子高齢化や希薄な地域との関係性は例外なく浸透し、先述したように、緊急時でも家族や地域での協力は望めなくなっている。つまり、災害対応力や生き抜く力を徐々にそぎ落としてきたのが現代社会とも言えるのである。

智恵の事例

こうした身近な課題を鑑みたとき、災害大国日本がそれに屈することがないよう脈々と培われてきた全国の「智恵」をもう一度掘り起こし、次の犠牲者を出さないために、私たちがきちんと伝承していくべきだとして生まれたのが『いのちをまもる智恵～減災に挑む30の風景（ストーリー）』という本である。大阪大学・渥美公秀先生、菅磨志保先生、花村周寛先生、そして被災地ＮＧＯ協働センター吉椿雅道氏らの絶大な協力を得て、２００７年３月に刊行した。ちょうどその頃は、市町村合併や郵政民営化が盛んに進行していた時期である。政治的な問題は無知な私にはわからないが、感覚的に「小さな地域の存在が失われ、かつその中の小さな智恵が消滅していく」ことに危惧を感じ、当時の日本郵政公社の年賀寄附金の助成を得て、制作することができた。

（特活）レスキューストックヤードが制作した書籍『いのちをまもる智恵～減災に挑む30の風景（ストーリー）』

※本書をご希望の方は同法人のホームページ http://rsy-nagoya.com/ からお求めください。

中身は、ぜひ手にとって味わっていただきたいが、古くは明治から言い伝えられているものや最近の災害では新潟県中越地震や兵庫県豊岡市の水害時のエピソードから生まれたもの、また警戒される首都直下型地震への備えの活動事例に至るまで多彩である。そして、全国を丁寧に訪ね歩き、智恵の伝承者本人らに丁寧に聞き取り調査をしているので、とても充実した内容となっている。例えば、「津波てんでんこ」。津波の時は親兄弟といえども構うことなく、とにかく一目散に一人で逃げろというものである。一見残酷な言い伝えに聞こえるが、何度も津波で壊滅的な被害を受けた地域にあって、そうでもしないと一族郎党が絶えてしまうという苦肉の智恵でもある。また「畳堤」。豪雨で水位が上昇しても最悪の堤防決壊を防ぐため、いざというときには各家庭の畳を持ち出して、畳が盾となるようにあらかじめ作られた溝に挟み込むというものである。この作業は地域の協力なしには成し得ないことは言うまでもない。そのほか、「なるほど」とうならせる智恵が満載である。

智恵を広める

不思議なご縁に恵まれて、本書の内容はＣＥＬ研究所主催のもと大阪ガスの実験集合住宅ＮＥＸＴ21の１階にある「Ｕ-ＣｏＲｏ」（大阪市天王寺区）で２００７年９月から約４ヶ月もの間、展示紹介していただく機会を得た。また

「減災キャラバン」パネル展 應典院（大阪市 天王寺区）

「減災トーク」高津宮（大阪市・天王寺区）

それをヒントに当法人が主催し、大阪の空堀商店街界隈で長屋再生などを手がける「からほり倶楽部」にもご協力をいただき、「減災キャラバン」と銘打って上町台地の主要拠点「應典院」「萌」「高津宮」「練」の4ヶ所で本書のパネル展を2009年2月の1ヶ月間にわたって開催することができた。またその主要メンバーらとの減災トークも4週連続で実施し、その後の交流会も含めて、今後の当方の活動や生き様にも多大な影響を与えてくれるような衝撃的な出会いをいただくことができた。この様子は再び現在U-CoRoで紹介いただいている。さらに今度は、からほり倶楽部が主催し、上町断層への警戒を意図した減災勉強会が連続講座で開催され、私も登壇した。

つい先日まで無関心（あるいは関心はあったが行動が伴わなかった）であったはずの減災というテーマに、ここまでネットワークが広がったこの過程自体が「減災の智恵」ともいえる。これらの企画で、エンドユーザである地域住民や道行く人にどれだけ影響を与えたかは計ることはできないが、先述したように、人間関係の希薄な現代社会に警鐘を鳴らす災害現場や地域社会がある一方で、熱くそして生き生きと人が動いている。昨今はCEL研究所が減災の拠点ともいえる。今度は何が企てられるか、楽しみにもなってきた。「智恵」とはまさしく人と人とが紡がれて生まれるものであるのだろう。こうした関わりの中にいると「人ってやっぱり暖かい」と感じるのである。今後も大切にしていきたいと思っている。CEL

◎ **栗田 暢之**（くりた・のぶゆき）

特定非営利活動法人レスキューストックヤード代表理事。1964年岐阜県生まれ。寺の長男として生まれ、大学卒業後は大学事務職員と僧侶の二足のわらじを履く。95年1月の阪神・淡路大震災で、約1400人の大学生を引率し、被災者支援活動を行ったことをきっかけとして災害ボランティア活動に取り組み、同年7月に「震災から学ぶボランティアネットの会」が設立された際に事務局長に就任。2002年3月、同会を発展的に解消し「レスキューストックヤード」を設立。常務理事兼事務局長を経て現在に至る。